黄帝の原初的性格について

御　手　洗　　勝

摘　要

鉄井慶紀氏対筆者関於以往被看成是五帝之一的聖帝的黄帝原始性格的研究提出了不同的看法，本論文対此進行了反駁。

鉄井氏根拠楊寛氏黄帝即皇帝（至上天神）的観点，認為黄帝的別名「軒轅」與在『易経』上意為「天」的「乾」相同。

筆者認為「黄帝」的涵義不是「皇帝」，而只能是水神的名称「伯夷」発音的転化，而且着眼於很多関於龍的伝説都與黄帝纏繞在一起的事実，従而提出了把黄帝的神容看成是龍的新見解。因為在中国水神之最优异的是龍。黄帝的別名「軒轅」原指人所乗坐的車轅，因其形如弯龍，天上的軒轅星座中諸星的形状也恰似龍形，故亦被称之為「軒轅」。同样，因黄帝的神容也是龍，故亦以「軒轅」為黄帝的別名。総而言之，水神伯夷被看成是龍的神容，雖然伯夷一向被説成其他的神，但是其実就是黄帝。而不是至上神＝天神即天。

1993年４月11日

(一)　少皋の伝説と玄鳥伝説（契の伝説）

黄帝は，中国古代のいわゆる五帝の筆頭の帝王であるが，その本来の性格は水神＝龍であると見るのが，筆者の見解であった。ところが，鉄井慶紀氏は，黄帝は至上神の天帝であるとして，筆者の見解を批判された。鉄井氏の論拠は，楊寛氏が，黄帝＝皇帝とする見解に，主として依拠したものであるが，それに加えて，中国古代の神＝少皋は黄帝の子とされているが，この少皋の側からも，その父の黄帝が至上神＝天であることを立證しようとしている。そこでまず少皋の性格について一考することにしよう。

『左伝』昭公十七年の条に，

「昭子問焉曰，少皞氏鳥名官，何故也，郯子曰，吾祖也。我知之。昔者……我高祖少皞摯之立也，鳳鳥適至，故紀於鳥，為鳥師而鳥名。」

とある通り，少皞摯が郯国の高祖であり，彼が即位の際に鳳鳥が飛来したという如き，即位の少皞と鳥の飛来とを関連づける伝承があるのに着目した鉄井氏は，「この説話は，『詩経』玄鳥篇の「天命玄鳥降生商，宅殷土芒芒」という説話や，これに基づく『史記』殷本紀所見の説話，即ち玄鳥が飛来して卵を堕し，簡狄がこれを拾って呑み，このために殷の始祖＝契

が生まれたという説話があるが，この玄鳥説話と少皞摯即位の際に鳳鳥がたまたま飛来したことは，共通のモチーフであると看做し，さらに郯國は，山東の一角にあり，殷人の支配下に在ったと考えられるので，「少皞摯は契と同一者で，殷の始祖と考えられる」とし更に殷人が白色を尚ぶので，殷人と白色とは極めて密接な関係がある。従って上天信仰を行う殷人が白を意味し上天の表象である少皞を自己の始祖としたことが考えられる」と述べる。そこで黄帝をその父とする『世本』などの伝承は，実は「黄帝の上天的性格を機縁として少皞と結びつき，父子とされたものと考えられた。

玄鳥伝説については，鉄井氏の研究に先立って，既に故加藤常賢教授に「殷商子姓考」という綿密・詳細なる名論文があり，玄鳥＝燕には，なお「嶲周」・「乞」などの異名があるため，これらの名義と「商」字とを，詳細に考察されて，殷の始祖神＝契は，玄鳥神＝妊娠神であることを論証され，さらにその原初的事実から玄鳥伝説への発展を跡づけておられる。その上，加藤教授は，やはり鉄井氏の論考の発表に先立って「少皋皋陶嬴姓考」－東夷族の始祖神－」を物されて，その「伯夷・伯翳・伯益が虞官となり，少皋が鳥師となった伝説の根拠」の一節において，「少皋が鳥師となった伝説は，特別の伝説でなく，水神が虞官となった伝説の一部に過ぎない。と謂うのは，虞官の仕事としては，鳥獣草木を馴養するとあって四者が挙げられているが，少皋の鳥師はその四者中の一つであるに過ぎないからである」と述べられている通り，玄鳥神＝契の伝説に対して，水神＝少皋＝鳥師の伝説が別に在り，前者が子姓の殷氏族の伝説であり，後者は嬴姓族の始祖伝説であって，その起源的性質が全く異なることを明らかにされた。契に関する玄鳥の伝説と，少皋における鳳鳥の伝説とを，同一視する鉄井氏の皮相的な見解には，到底従うことができない。氏は何故に加藤説を熟視し批判しなかったのであろうか，理解に苦しむ。契が少皋であるとは到底考える事ができない。

まして『説文』嬴字下に「嬴は，少皋氏の姓なり」とあり，又少皋を「吾が祖なり」とも「我が高祖の少皋摯」とも謂っている郯子の國である郯を，『史記』秦本紀，『漢書』地理志，さては王符の『潛夫論』志氏姓篇に，「嬴姓の國」と明言して在るのに，鉄井氏は，何故にこれを殷氏族すなわち子姓族の國だと考えて，殷契と郯国の少皋摯とを同一人物とするのか，また鉄井氏は，殷は白色を尊んだとして，少皋の「皋」の有する白色の意とを関連づけ，さらにその白色を「天」の表象と考えられているが，この白色も殷の始祖鳥＝玄鳥の色に由来しているのである。故加藤教授が商字の『説文』の解に，商を「从冏章省声」とあるのを批判されて，『爾雅』釈畜に「驪馬…白州驠，尾本白騢」と見えるのを援用し，「即ち黒色馬の尾穴股間の白いのを驠と謂ひ，また尾本の白いのを騢と謂ったのである。驠と騢とは実は同義である。體が黒色で股間の色白の馬を燕・晏と稱する以上，燕を章と稱するは同意義であって当然と思はれる。この立場から商字を解釋すれば，その偏旁辛は清新明白の意の音符（これは後世五行の配当に殷が白であるのと関係があるらしい）であり，冏は州尻の意の意符であって，全体として尾白の燕の意であると謂ひ得ると思ふ。辛の聲と意とに従ふ妾字は，額

上に入黠した女奴隷の意で，一見それと判明する印を有って居たから章の音となった如く，商を白の意から章によって解釋してもその意は通ずるのである。が，『説文』の説解では到底通じ得ないと思ふ。」（加藤教授「殷商子姓考」『中国古代文化の研究』昭和55年東京，所収頁464～465）。と述べて，白色を殷に配当するのは，天の崇拝と関係があるのではなく，玄鳥神（妊娠神）の尾穴股間の白色であるのにこそ由来することを看破している。されば鉄井氏の誤解は氏の論文の発表に先立って存在した加藤教授の名論文を看過して自己の思い込みに固執した事に因ると言うべきである。

(二)　「軒轅」の名義

次に鉄井氏は，黄帝が至上神＝上帝である証拠として，その号が「軒轅」であったことを以てする。しかし，「軒轅」という名義については，筆者は「<軒轅>の意味について」という拙稿を，同氏の他界前に発表しており，これは，今日に於ても毫も変更する必要を認め得ないので（拙著『古代中國の神々』第二部第二節を参照されたい），以下これを基礎にして鉄井説の批判を行なうことにする。

鉄井氏は「軒」・「轅」・「乾」の三字について，これらは韻母がともに元部に属し，声母も同類であるため，「この三音は極めて近いといえる」として，声韻上から，「軒轅」が，『易』において「天」を意味する「乾」に近いことに着目し，更に意味上からして，「輈曰軒轅，言轅之高者也」と説く『説文通訓定声』の説に依拠し，「ながえが高くはね上がった形の馬車の意である」と述べ，更に『易』説卦伝に「乾，天也」とあり，『説文通訓定声』が，これについて「上に達する者，これを乾と謂う。凡そ上達する者は気に若(し)く莫し。天は精気たり，故に乾をば天と為す」と解説する（『説文通訓定声』軒字下）のに左袒し，かくて「「軒・轅・乾」の語原は，〈高くあがったもの〉即ち高き天を意味し，「軒轅」は乾の緩言」であると考える〉とさえ述べ，よって「黄帝の名を軒轅というのも，黄帝の上帝的性格にもとづいたものと考えられる」と結論づたけのである。

ところで『説文』には，「軒」字について，

「曲輈の藩車なり」

とあり，段玉裁は「曲輈にして藩蔽有るの車を謂うなり。曲輈とは，戴先生曰く，小車は，これを輈と謂い，大車は，これを轅と謂う。人の乗る所は，其の安らかなるを欲す。故に小車は暢殼にして梁輈，大車は，任載するのみ，故に短轂にして直轅なり。許，藩車上に於て，必ず曲輈と云える者は，輈の穹曲して上り，而る後に軒と言うを得るを以てなり。凡そ軒擧の義，此より引申す。曲輈は所謂る軒轅なり。」（『説文解字注』軒字下）。

と述べている。これによると，軒轅の「軒」とは，輈(ながえ)が穹曲してあがる，人の乗る車の長柄であり，それは，単に高くあがっている長柄ではない。許慎が「曲輈」と述べているのを，決して看過すべきではないのである。

つぎに「軒轅」の轅字については，『説文』に「轅，輈也，从車袁声」とあり，『説文通訓定声』には，

「按・大車・柏車羊車，皆左右両木曰轅，其形直，一牛在轅間。田車・兵車・乗車，皆居中一木，穹曲而上曰輈，其形曲，両馬在輈旁，轅與輈対文則別，散文則通，輈曰軒轅，言轅之高者也（『説文通訓定声』轅字下）。

と謂う。これによると，大車・柏車・羊車等，重い貨物を運ぶ牛車の左右二本の長柄を轅と謂うのであり，その形は眞直ぐで，牽引する牛は，左右の両長柄の中間に在るのである。これに対して田車・兵車のごとき，人が乗る馬車は，一本長柄の車で，その長柄は，まがって上挙しているのである。そして，軒と轅とは，対文する時は各別のものであるが，散文する時は，通用するのであって，一本長柄の輈をば疊韻連語の「軒轅」を以て呼稱するのである。これを要するに，「軒轅」とは，屈曲して上挙する馬車の一本長柄であって，『釈名』釋車に「輈は勾なり。轅，上勾するなり，蓋し，その勾曲するを以てして，之に名づけしならん」と謂う所以である。それは，単に上挙する長柄ではない。

されば，輈の形は，龍の姿を連想させるものがあった。『楚辞』九歌の「東君」に

暾將出兮東方　　ほのぼのと日は東に出かけて
照吾檻兮扶桑　　扶桑から吾が家の檻（てすり）を照らす
駕龍輈兮乗雷　　龍の轅（ながえ）をかけて雷の車に乗り
載雲旗兮委蛇　　雲の旗うねうねとなびかせ……

とあり，扶桑から升る東君＝太陽神は，轅（ながえ）を龍とし，雷の車輪をつけた馬車に乗り，雲旗の旗指物を高く掲げつつ，大空を渡るのである（大林太良氏「中国古代の馬車の神話」『中国の歴史と民俗』1991，東京，頁28）。「軒轅」とは，屈曲して上挙する馬車の一本長柄（輈）の意であって，単に上にはね上がった長柄の意ではなかったからこそ，輈が竜を連想させたのである。要するに，天の方に挙がっている長柄であるが故に「軒轅」は「天」を意味すると説く鉄井説は，全く短絡的な附会にすぎないと謂わざるを得ない。青木正兒博士が，「竜の形は曲って轅に似ているので轅に擬したのである」と解説されているのは，輈の姿が竜形に似ていたことを示す（新訳「楚辞」『青木正兒全集』第四巻，東京，昭和四八年，頁50）。

軒轅は，このように竜の形をした屈曲した長柄であったから，『史記』天官書に

「權，軒轅，軒轅，黄竜体」

とある通り，軒轅座の星は，古人によって黄竜の姿体に眺められたので，「軒轅」が星座の名稱となったのである。張衡が，「周天大象賦」（『張河間集』「漢魏六朝百三名家集』）に於て，「夫（か）の軒轅の宮を觀るに，さながら騰蛇の體の若（ごと）し」と賦しているのを見るがよい。黄帝の別号を「軒轅」と謂ったのは，正しく黄帝の神容が竜であったためではあるまいか。そこで黄帝の原初的性格について，更に考察の歩を進めることにする。

(三) 「黄帝」の性格 ―竜・雲との関係―

『左伝』昭公元年の条によると，玄冥師（水官の長）であった昧を，その子孫とする金天子＝少皞と，起源的には同一神であった伯益（＝伯夷）について，「淮南子』本経訓・『呂氏春秋』勿躬篇に，

「伯益作井」

とあり，伯夷についても，『大平御覧』巻一八九所引の『世本』に，

「伯夷作井」

とあり，さらに『路史』後紀巻八，及び『易』井卦「釈文」所引の『世本』には，

「化益作井」

と伝えられるのは，水神としての彼等の本質が露呈した貴重な記録であるが，『初学記』巻七所引の『世本』には，

「黄帝見百物，始穿井」

とあり，また『御覧』一八九，『易』井卦「釈文」所引の『周書』にも，

「黄帝穿井」

とあるのは，虞官（山沢の官）となったという伝承を有する伯益（化益）・伯翳（伯夷）と，黄帝が起原的には一神＝水神であった事実を示唆するものである。

ところで，水神の黄帝が竜と関係が深く，さらには竜の神容を有する神であったことは，その証拠が多い。『史記』五帝本紀の一つの記載，すなわち

(1)黄帝，黼黻衣，大帯，黼裳，乗龍扆雲

によると，黄帝が竜に乗り，雲を扆（ついたて）としているという如き雅馴でない記述があり，また『山海経』大荒北経に，

(2)黄帝乃令応竜攻之（＝蚩尤）冀州之野。応竜畜水，蚩尤請風伯雨師，縦大風雨。

とあるように，黄帝が蚩尤と闘う際に用いた武器は，外ならぬ応竜であった。更に『淮南子』天文訓にも，

(3)中央，土也，其帝黄帝，其佐后土，……其獣黄竜。

とあり，又，『史記』封禪書には，

(4)黄帝得土徳，黄竜地螾見

とあり，さらに『呂氏春秋』有始覧応同篇にも，

(5)凡帝王之将興也，天必先見祥乎下民，黄帝之時，天先見大螾大蝼。

とあり，「大蝼」が黄帝の瑞祥として出現しているのであるが，ここ(5)には，竜の記載はない。けれども『説文』には，「螭，若龍而黄，北方謂之地蝼」と見えるので，黄帝の瑞祥として出現した「大蝼」とは，巨大な黄色の「地蝼」の意かも知れない。とすれば，それは，やはり「竜の属」である螭（みずち）である。

つぎに「五帝本紀」を作るに当たって，雅馴な資料を用うべきだと考えていた司馬遷も，「封禪書」を作るに当たっては，方士の説の荒唐さを，ことさらに示すためであろうか。次のような，黄帝が竜と関連した雅馴でない記述をしている。すなわち

(6)黄帝采首山銅，鋳鼎於荆山下。鼎既成，有龍垂胡髯，下迎黄帝。黄帝上騎，羣臣後宮従上者七十餘人，龍乃上去，餘小臣不得上，乃悉持龍髯，龍髯抜堕，堕黄帝之弓。

とあるのがそれで，ここでは，黄帝が外ならぬ龍に乗って登遷したことが，明瞭に見えているのである。なお『風俗通』聲音篇に，「昔，黄帝駕象車交（蛟）龍」とあり，その「聖人」篇には，「黄帝龍顔」と伝えられ，『潛夫論』五徳志にも「其相龍顔」と見える。これらはすべて黄帝と龍との密接な関係を告げるものである。ところで，この際注目すべきは，著名な神話学者＝ハリソン女史（G. E Harrison）が，「神がその上に立ったり，乗ったり，または，その顔に被ったりしている動物は，その神の原始動物であることが，今では承認されている」と述べた原則が，今日でもやはり承認されるものならば，黄帝の神容や本体を，龍としても，決して附会ではないであろう（G. E Harrison, Mythology, 1924 New-york Burlingame 1963（reprint）p.21，佐々木理訳『ギリシア神話論考』東京，昭和18年，頁31）。

以上のうち(3)(5)(8)(9)の資料に拠った，著名な中国の学者＝聞一多氏が，「黄帝が竜であるという問題は，大変簡単だ」と説いて黄帝即龍説は見易いことだと唱えたのは，筆者の立場からは，まことに妥当であると考える（聞氏「伏羲考」『神話與詩』全集選刊之一，北京1957所収），というのは，中国においては，水神の尤なるものは，竜であったからである。

ただ，黄帝即水神＝龍説にとって，一見したところでは，障碍となるかに思われるのは，『左伝』昭公十七年の条に，

郯子来朝，（魯）公與之宴，昭子問焉，曰，少皞氏鳥名官，何故也，郯子曰，吾祖也。吾知之，昔者黄帝氏以雲紀，故爲雲師而雲名。炎帝氏以火紀，故爲火師而火名。共工氏以水紀，故爲水師而水名。大皞氏以龍紀，故爲龍師而龍名。我高祖少皞摯之立也，鳳鳥適至，故紀於鳥，為鳥師而鳥名」

とある記載である。これによると，山東省郯城県に居た所の少皞の子孫＝郯子の伝承によって，黄帝－雲，炎帝－火，共工－水，大皞－竜，少皞－鳥の如き関係があったことが分かる。今これについて再検討しよう。

まず共工であるが，彼が「水もて紀し」たのは，共工が蛇神であったからである。『淮南子』墜形訓高注・『山海経』大荒西経郭注所引「啓筮」に，共工の神容が「人面蛇身」であると記され，さらに『左伝』昭公二十九年の条に，共工氏の子が「句竜」の名を以て稱せられ，又『山海経』海外北経所見の共工氏の臣＝相柳氏も「九首人面蛇身」と記されているので知られるように，共工は水と関係深い蛇体の神である。しかるに，『左伝』の前掲記載からは，蛇神としての共工の姿を殆ど捉えることはできない。これは，郯子所伝の伝説が，相当合理化の進んだものであることを暗示しているのだと思う。従って，かしこで「雲もて紀し」たと

いう雲師＝黄帝の神容あるいはその本質も，直ちに雲だと考えなくてもよかろう。そしてこのことにより，上掲の郯子所伝の伝承中における少皞——鳥の関係についても同様であろうと類推することができる。一体皋陶・許由・伯夷・柏翳などが，一神の分化であることは，楊寛氏によって既にほぼ明らかにされていたが，さらに彼等が伯益・柏翳・少皞とも一神であることが，故加藤常賢教授の研究によって確実となった（楊寛氏「中国上古史道論」『古史辨』第七冊，香港，1941，上篇，頁345－352。加藤常賢氏「少皞皋陶嬴姓考」『中國古代文化の研究』東京，昭和55年所收）。そして伯益・柏翳には，彼等が帝舜の「山澤の官」＝虞官（山澤の鳥獣を掌る官）になったという伝承があり（『書』舜典・『國語』鄭語），さらに嬴姓族神の柏翳が「舜を佐けて鳥獣を調訓し」，その子の大廉が「鳥俗氏」（鳥養氏の意か？）と謂われ，その子孫の孟戯，仲衍は「鳥身人言」の怪物であったことは，『史記』秦本紀の所伝であるが，これらの事実こそは，『左伝』に於て嬴姓族の祖神の少皞が「鳥もて官に名づけ」た事実と照応するものであることは，既に傅斯年氏も觸れられた所である（「夷夏東西説」『傅孟眞先生集』台北，1952，巻4，頁77），さらに柏翳が虞官となり，鳥ととくに関係が深く，その神容も鳥であったことは，柏翳即ち少皞が，允格とともに鳥獣の集まり棲む「沇水の澤」の神に外ならなかったためであることは，故加藤教授が初めて明らかにされた所である（「少皞皋陶嬴姓考」『日本学士院紀要』15—2東京，昭和32年所収，後に同氏『中国古代文化の研究』東京昭和55年（1980）所收）かくて少皞の本質が澤神であるのに，それは裏面にかくれて，少皞が鳥師となったことだけが，伝説の表面に出現しているのだとすれば，郯子所伝の，黄帝の場合にも，その官を「雲もて紀し」たという伝承をば，黄帝の本質あるいは神容が雲と関係があることを暗示するものとして解して差支えないが，彼が雲そのものであるとは考えなくてもよいことになろう。『荘子』天運篇に「龍は…雲気に乗じて陰陽に養わる」とあり，さらに『論衡』龍虚篇に「愼子曰わく，蜚龍，雲に乗り，騰蛇，霧に遊ぶ」と見え，『淮南子』天文訓に，「龍與りて景雲起こる」という記載などは，「黄帝，これ（＝道）を得て以て雲天に登る」という『荘子』大宗師篇の所伝とともに，龍と雲との緊密な結合を示すものと考えられる。そこで黄帝が「雲もて紀し」たという『左伝』所載の伝承は，黄帝の神容あるいは本質をば，水神＝龍とする見解と矛盾するものではなく，却ってこれを強化するものと言えるであろう。

かくて黄帝は水神であり，水神たるに相応しく，その神容が雲に関連のある龍であったと言うことができる。黄帝は鉄井氏の考えた如き，天＝至上神ではなかった。

そこで次に，この事を，その名称＝「黄帝」の名義の研究からして一層解明することにしよう。

㈣　「黄帝」の名義

筆者は，かつて「神農と蚩尤」という論文（『東方学』四十一輯，昭和四十六年所収）にお

いて，「黄帝」の名義について，次の様に述べたことがある。そして，これは今日でも変更する必要を毫も認め得ないので，以下にこれを再録する。

筆者はさきに黄帝は通説のように「皇帝」（上帝の意）の転化独立したもとの見るべきではなく，それは水神の伯夷と一神であると述べたが，その音関係の説明については，端的でないという憾みが残った（黄帝の伝説について」『広島大学文学部紀要』－日本・東洋－37巻１号）。そこでいまこれを略説するに，「黄」を声符とする𤣥字は，許愼が「読んで郭の若し」と述べているように，郭音であった。これは，「廣」を声符とする「擴」の音が，「古莫切」であるのと同様であり，別に異とすべきではない。ところで右の郭音は伯音に近かった。『荘子』斉物論所見の「南郭子綦」が，同書の「人間世」篇・「徐無鬼」篇・「大宗師」篇には「南伯子綦」に作られているのが，その端的な証拠である。

つぎに「伯夷」の夷音と「黄帝」の帝音とについて考察するに，『説文』に夷を声符とする鶂字があり，そしてその重文として鵜字があるので，夷音は弟音であったことが容易に分かる。ところで，朱駿声は，「鵜は魚に从い弟の声，字，亦た鯷に作り，鮧に作る」と述べているので知られる通り，夷・弟・帝音は，同音もしくは近似音であった。だから今や，「伯夷」の二音は転じて「黄帝」となったということができる。尤も帝嚳・帝堯，帝舜などのように，帝の字がその神名に冠せられるのが普通であるのに，炎帝や黄帝などのように，帝の字が，その神名の下についているので，これを以て黄帝が後代人の造作にかかる証拠とする説がある。しかし，黄帝の帝字は，「伯夷」の夷音が「帝」の意であるかのように解釋されるに至って使用されたのにすぎないと思う。さてその「伯夷」は，故加藤教授が，はじめて看破された通り，水神の「允格」（＝顓頊）の転倒音に外ならなかった（加藤常賢教授「允格考」『日本中國学会報』十一集昭和34年（1959）東京）。

なお，このように特定の神が，その神名の音変化に伴って，別の存在に転化し，しかも，それらが祖先－子孫の関係に系譜づけられる例は，これを見出すに困難でないのである。その最も明瞭な一例は，『史記』楚世家の系譜に見出すことができる。すなわち，かしこでは，祝融の子孫に陸終なる者が居り，その陸終の末子の季連の後裔に鬻熊がいるが，これら祝融・陸終・鬻熊の三者は，もと一神にすぎない。また『詩』商頌長発篇には，商・玄王・湯など商（宋）の祖先神の名が系譜的に配列されて讃美され，各別の存在として見られていたが，これら神名を詳細に考察すると，やはり起原的には一神である（故加藤常賢教授「殷商子姓考」『東洋の文化と社会』第一集，拙稿「帝舜の伝説について」『広島大学文学部紀要』（日本・東洋）28巻１号を参照せよ）。

なお「黄帝」の名義に関して，ここで附記しておきたいのは，「黄帝」と「夷鼓」との関係である。『國語』晋語㈣に，司空季子の語として「黄帝の子は二十五人，その同姓なる者は二人のみ」とあり，黄帝の息子たちが持っていた多数の姓号のうち，二人の息子の姓号だけが，同一であったことが分かる。そして季子の言によると，その二人の息子

とは，外ならぬ夷鼓と清陽なのである。

「夷鼓」という名稱は，先に立証した黄帝＝伯夷の「伯夷」と同一の夷字を含んでいることが，先ず，注目されよう。次に「夷鼓」の鼓音について考察するに，『説文』の鼓字の解，および『風俗通』聲音篇に，「鼓は郭なり。万物，皮甲を郭して出づ。故にこれを鼓と謂う」とあるので，鼓音＝郭音であることに疑問の餘地がない。筆者は，さきに黄帝が起原的には伯夷に外ならないことを証明する一助として，黄音＝擴音であり，又た擴音＝郭音であること，その上，郭音＝伯（白）音である事実を例証したが，これが正しければ，「夷鼓」という神名の音は，「夷郭（伯）」であるので，この二音は，「伯夷」の転倒音であるとせねばならない。すると「夷鼓」も，黄帝と起原的には一神である故に，一神の分化独立の結果，両者がやはり親子の関係に系譜づけられることとなったと考えてよく，「晋語」所見の「夷鼓」という名稱は，他の文献には見えないものではあるが，やはり根拠あるものだと考えなくてはならない。

因みに「晋語」において黄帝と同姓であるのは，（夷鼓と）清陽だけだと稱せられているが，『史記』黄帝本紀に，清陽と兄弟とされている「昌意」という神名も，実は「清陽」の転倒音に外ならず，それらは，ともに，根元的には沆澤の水神＝「允格」という名稱に，由来するものであること，あたかも「伯夷」が「允格」の転倒音であるのと同様であることについては，拙著『古代中國の神々』第二部第二章，第五節に詳論してあるので，参考にして頂きたい。

(五) 黄帝と阪泉・涿鹿

以上の所説により黄帝が水神＝伯夷であり，その神容は龍であることが明らかとなった。そこで，この見地からして，この事を補證する，黄帝と不可分の関係にある地名－阪泉と涿鹿－について一考しよう。

『左伝』僖公二十五年の条に，晋の文公が，鄭に蒙塵した周王を，都に還幸させようとしてその成否を卜偃をしてトわせたところ，卜偃は，

「曰，吉，遇黄帝戦于阪泉之兆」

と答えたという。また『大戴禮』五帝徳篇にも，

「黄帝，少典之子也，曰軒轅。撫萬民，度四方，教熊羆貔豹虎，以與赤帝戦於阪泉之野，三戦而得行其志。」

とあり，黄帝が赤帝（炎帝）と戦った場所が阪泉であったとされる。この「阪泉」は，まさに水神＝黄帝の戦場として相応しい場所であったことが，文字面から一見して分かると思う。が，さらに『説文』を見ると，𤇾字があり，『説文繫伝』に

「泉水也。从泉緐声。讀若飯。臣鍇曰，阪泉，蓋本此字。服萬反」

とある。すなわち，前掲の「阪泉」という黄帝の戦って赤帝に大勝した二字名の地名は，実

は「𤇾」一字を二字にしたもので，その意は「泉水」＝「泉出の水」という地名であった。筆者が水神の棲む場所として相応しいと言ったのは，このために外ならない。さらに，ここで注目すべきは，黄帝は熊羆貔虎などの猛獣を調馴して，これを武器として赤帝と戦っている事である。この事は水神＝黄帝の特色として特筆すべきものであったことは，『列子』黄帝篇に，

「黄帝與炎帝戦於阪泉之野。師熊羆・狼豹・貙虎，為前驅，鵰鶚・鷹鳶，為旗幟。」

とあって，黄帝は猛獣の外に猛禽をも駆使して戦闘しているのである。これは水神で虞官と考えられた伯夷が鳥獣を調順したと伝えられるのと軌を一にするものであって，黄帝の水神であることの明証となると思う。『穆天子伝』に，

「春山之澤　清水出泉。温和無風，飛鳥百獣所飲食」

とあり，『詩』鄭風の「大叔于田」篇の「毛伝」に，

「薮澤，禽之府也」

と見えるので分かる様に，「薮澤」は禽獣の集まる場所であるので，故加藤教授が考えられた様に，澤神が禽獣の支配者と考えられるのは，自然であった。かくて澤神＝黄帝も鳥獣の支配者となり，みずからも澤に棲む龍神であったのである。

なお，黄帝の都邑は涿鹿山下の平地に在ったという（『史記』黄帝本紀）が，黄帝が蚩尤と戦ったのも，この涿鹿の野であった。この黄帝と関係の深い「涿鹿」という名称には，いかなる意味があるのか。「涿鹿」について，朱駿声は「疊韻の連語，説文，上谷有涿鹿縣。荘子盗跖，與蚩尤戰于涿鹿之野，在今直隷宣化府保安州，」（『説文通訓定声』涿字下）とある通り，疊韻の連語であるので，その意味は，「涿」一字を明らかにすればよい。『説文』の涿字下には，「流下滴也」とあって，「流れしたたる」の意である。だから『広雅』釋詁にも「涿は漬なり」とある通り，「水につかる」，「水につける」，の意であり，水神＝黄帝と無関係な地名ではない。これも，やはり，黄帝が水神であった傍証となるであろう。更に『呂氏春秋』孟秋紀蕩兵篇に「兵の自(よ)りて來(きた)る所久し。黄炎，故(もとよ)り，水火を用ふ」とあって，炎帝はその名稱の通り，火を兵器として用いた筈であるから，水を兵器として用いたのは，水神＝黄帝でなくてはならない。かくて，黄帝が水神であったことは，ますます明らかとなろう。

(六)　余論……黄帝は果して太陽神か？

さて，鉄井氏は，黄帝＝天神説を主張しながら，黄帝は太陽神でもあると主張し，天神より太陽神への変化展開を想定して，その実証に腐心・努力をしている。（鉄井氏『中国神話の文化人類学的研究』第二節）これは，方法論上からしても，困難をきわめるものであると思う。何となれば，氏みずから「周知の如く，黄帝が太陽神であることを直接に明言した文は存在していない。剰え，中国古代神話は他国のそれに比べて僅少の資料しか現存していない。従って黄帝を太陽神と見る卑見は屋上屋を架する単なる仮説以上には出ないものであること

は承知している」と述べているからである。しかし，とにかく氏は黄帝＝太陽神説の主張を敢行しているのである。

これに対する筆者の批判は，多岐にわたる必要があるし，又た今は時間的余裕がないので，差し控えることにし，他日機会があれば，再び批判を試みることにする。ただ，現在の時点においても，予想できることは，筆者の黄帝＝水神伯夷説は，撤回する必要が，毫もないので，鉄井氏の黄帝＝太陽神説は，氏の黄帝＝天神説と論証上の矛盾を犯しているばかりでなく，これを実証する事が，資料的にも困難で，「屋上屋を架する単なる臆見」であろうということである。

（平成五年四月十一日，外国語学部教授）

（附記）摘要の中国語への飜訳は，広島大学講師（非常勤），池田美津子氏等によって成るものあり，謹んで謝意を表する。